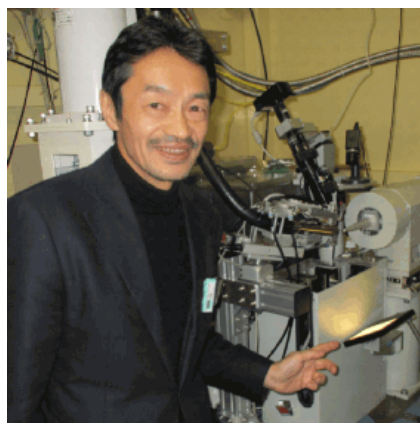




紫芳会だより ～輝く先輩達～

東北大学大学院 農学研究科教授・農学博士

内田 隆史氏 (高校24期)
うち だ たか ふみ

～生体における酵素機能について

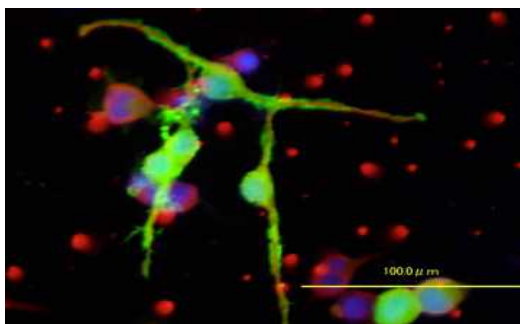
世界レベルで研究する分子酵素学研究室～

No.38

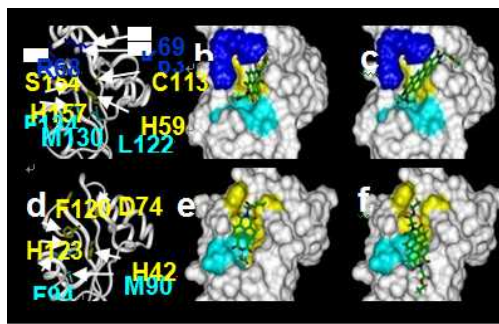
2015.11.1.発行

今年8月、立高の生徒15名が中村先生ら3人の教師に引率され仙台まで研究の話を聞きに来てくれた。彼らに講演をしながら自分の高校時代を思い出した。私が立高に入学したのは1969年で約半世紀も前のことだ。

入学の前年、2年間の癌との闘病で苦しんだ母を亡くし、母の病氣治療のため札幌、東京下町、三鷹と3つの中学校を転校させられた私は、心の中の吹き荒れる嵐に翻弄され生きる意味について悩みながら立高の門をくぐった。当時、アメリカのベトナム戦争反対運動や中国の紅衛兵運動などに刺激され日本でも学生運動が先鋭化していた。立高にもそれに感化され行動する生徒も現れた。私も影響を受けたが、私には社会をどうするかの前にはまず自分をどうするかの方が問題だった。立高生は“三多摩のエリート”として教師はもちろん付近住民からも強く信頼され、自由も尊重されていた。自主性を重んじる教育は時間がかかるし厳しくもあるが将来的にはタフな人間を育てる。何よりも私には自由なゆったりした時間がありがたかった。本を読み通したく徹夜したり、立川名画座で弁当を食べながらいっぺんに3本も映画を見たりもした。おかげで立高にいた3年間で私の傷ついた心も徐々に癒された。そのころ始めたランニングは今でも続けており、毎日の数キロのランニングは私の心身の健康に欠かせないものとなった。どう生きるかという明確で具体的な答えが出たわけではないが前を向いて生きていこうという気持ちになれた。進路についても、小説家、映画監督、建築家、医者など、なれるかどうかはともかく本や映画に影響されさんざん勝手に悩んだ。その後東京大学の理科II類に入学し全く予想もしていなかった応用生物化学を専門に選ぶことになった。



神経細胞分化制御分子 (アルツハイマー病治療薬探索)



酵素・阻害剤複合体の分子モデル (抗癌剤の探索)

半生を振り返ってみると自分の特性や能力などを熟慮してその時々を選択をしていたのだという事実に改めて気が付く。これまでに何度も選択の機会や研究を断念しなければならない局面もあったが、曲がりなりにも応用生物化学の研究を続けてきているからだ。国内外の企業や公的研究機関、大学と職を変えながらも一貫して癌を中心とした基礎医学に関わる研究をしてきた。まだ誇れるような大きな成果はないが先輩たちの業績の上に小さな石を積み上げることはできたし、これからもっと社会に貢献する仕事をしたいと思っている。研究第一主義に加え、立高の伝統である自主性を重んじる教育をモットーにしてこれからも毎日走りながら、研究と教育を続けていきたいと思っている。

★内田教授の分子酵素学研究室ホームページはこちらからご覧いただけます。 <http://www.agri.tohoku.ac.jp/enzyme/index-j.html>